

日本語人は「ジェンダー・フリー」を どのように理解しているか

— 大学生の調査から —

佐々木 恵理

1. はじめに

この数年というもの、日本各地で「ジェンダー・フリー」に関連する事件が起き⁽¹⁾、「ジェンダー・フリー・パッシング」と総称されるフェミニスト叩きだけではなく、「ジェンダー」ということば（概念）さえその標的になっている。女性学やジェンダー論に関わる研究者（専門家・実践者も含む）たちは、ジェンダーの概念を再確認しながら、意図的に捻じ曲げられた「フェミニストが主張するジェンダー・フリー」について、様々な視点から反論を試みている⁽²⁾。

「ジェンダー・フリー」は、東京女性財団が1995年に発行した『Gender Free 若い世代の教師のために』（深谷和子、田中統治、村田敦）の中で使われたことばで、これは元々「公的教育はジェンダー・フリーであるべきか」（“Should Public Education be Gender Free?”）というシンポジウムから抜粋したバーバラ・ヒューストンの論文からの引用であった⁽³⁾。日本では、このことばは女性学・ジェンダー論研究者の中でも、特に教育関連分野（教育学、性教育、教育の現場）でのみ多用されてきた。そのために、積極的にこのことばを使ってゆこうとする研究者がいる一方で、使わないと主張する研究者もいるのが現状である。

筆者は「ジェンダー・フリー」に関して、「〈ことばとジェンダー〉のこれからを考える」というシンポジウムの内容とそれに関連する論考集（明石書店、2007年発行予定）⁽⁴⁾の中で『ジェンダー・フリー』に翻弄されるひとつと一言語領域からの分析」と題した論考を書いた。そこで、日本語、エイゴ（カタカナ英語）と英語の混乱状態と、それに翻弄される日本語人を検証

した。本論は、「ジェンダー・フリー」ということばが日本語人にどのように理解されているのかを「ジェンダー」と“-free”に関する大学生のアンケート調査を元に論じるものである。

2. 「ジェンダー」はどれくらい理解されているか

1995年、北京で第4回世界女性会議（北京女性会議）が開催され、それ以降、日本に「ジェンダー」ということばが広まった。「ジェンダー」は「社会的性」のことを言い、このことばの登場によって、それまで「生物学的性（セックス）」の性区分からしか見えてこなかった性差別が、実は、社会の「ジェンダー規範」によるものだという事実が浮き彫りにされた。この新しい切り口により、女も男もそれぞれのジェンダーを身にまとい、ジェンダーはあくまでも、文化、社会、時代、歴史的に作り上げられてゆく可変的な性であることが理解できるようになった。また「ジェンダー」は、性的指向や性的身体性、性行動・性行為などを表す「セクシュアリティ」ということばと共に、日本における「性」の捉え方を根底から揺るがすことになった。

「ジェンダー」は、女性学・ジェンダー論の研究者たちには周知であるが、それでは「普通の人」である大学生はどれくらいジェンダーについて知っているのであろうか。まず、「ジェンダーの定義に関するアンケート」⁽⁶⁾を見てみることにしよう（表1）。学生には「ジェンダーについて知っていることを何でも書きなさい。分からないと書いてもよい」と指示し、回答は自由記述形式をとっている。曖昧な回答も多かったが、「ジェンダー」について次の5つの基準で分類した。(1)よく分かっている：適切な用語が使われており、ジェンダーの第一義的な概念について簡潔に説明されている、(2)だいたい分かっている：不適切な用語も使われているが、ジェンダーの第一義的な概念の一側面が説明されている、(3)ほとんど分かっていない：不適切な用語が多く、ジェンダーの概念のほんの一側面しか説明されていない、(4)間違っている：ジェンダーの概念が説明されていないか誤解されている、(5)分からない：学生自身が「分からない」と書いた上で、ジェンダーの概念が説明されていないか誤解されている。

(表1) 「ジェンダー」の定義に関するアンケート

(総数169名：女子68名、男子101名)

	女		男		合計	
(1)	6(8.8%)	10	3(3.0%)	11	9(5.3%)	21
(2)	4(5.9%)	(14.7%)	8(7.9%)	(10.9%)	12(7.1%)	(12.4%)
(3)	19(27.9%)	58 (85.3%)	14(13.9%)	90 (89.1%)	33(19.5%)	148 (87.6%)
(4)	19(27.9%)		35(34.7%)		54(32.0%)	
(5)	20(29.4%)		41(40.6%)		61(36.1%)	
小計	68		101		169	

「ジェンダーを理解している」と判断できる(1)(2)は、女子で14.7%、男子で10.9%、全体では12.4%にすぎない。つまり、全体として9割近い学生がジェンダーのことを正確には知らないことになる。性別で比べてみると、女子の場合は、(3)(4)(5)の割合がほぼ同じなのに対して、男子の場合は、(4)と(5)で男子全体の約75%を占めているのが特徴的である。

さらに、(3)をどう捉えるかによって別の側面が見えてくる。上の分析は(3)を「表面的にしか理解していない」と捉えたときの数値である。ここで(3)を「表面的にでも理解している」と捉え直してみると(表の網掛け部分)、「漠然とではあってもジェンダーのことを理解している」女子は42.6%、男子は24.8%、反対に「まったく理解していない」のは、女子では57.3%、男子は75.3%と、性別による知識の差が明らかになってくる。この数字の差は、性差別に対して、女子は被差別者として関心が高く、男子は差別者として関心をもちにくいという表れだと思われる。

それでは具体的に、(4)と(5)の「ジェンダーをまったく理解していない」と考えられる学生が書いた記述を見てみよう。自由記述であるために、学生が書いた内容の一部を「キーワード」でくくり分類してみた。原文の誤記等は訂正し、意味を損なわない程度に書き直している箇所もある。また()内は記述した学生の性別を表す。

性別／性差：

「性差」(女・男)、「男性・女性それぞれの特有的なものを表したもの」(女)、

「女性と男性の元からもつ性質、特徴のこと、またその違い」(女)、「男女の性の格差」(男)、「身体的な差はもちろん、社会、文化が生んだ格差」(男)、「[ジェンダー論とは]人間の性別に関する学問」(男)、「男女の考え方の違いや、指向の違いを指す」(男)、「異性についての違いや疑問」(男)、「男性と女性では、体つきも違ったり、考え方も違うが、なぜ違うのかを知ること[がジェンダー論]」(男)

性自認：

「内面の性」(女)、「精神的性」(女)、「性同一性障害」(女・男)、「その人自身の意識による性の分けかた」(男)、「男、女それぞれのアイデンティティを表す言葉」(男)

セクシュアリティ：

「同性愛」(女)、「男どうし、女どうしで愛しあうこと」(男)、「愛のこと」(男)、「性教育」(男)

規範：

「男は男らしくふるまわないといけないとか、女は女らしくふるまわないといけないなど」(男)

差別：

「男女差別」(女・男)、「性差別」(女・男)、「女性差別」(男)、「人種差別」(女・男)、「男尊女卑」(女)、「セクハラ」(女・男)、「男女平等」(男)

女性問題：

「女性進出」(女)、「差別に対する女性の権利、主張」(女)、「女性の運転手が増えてきたこと」(男)、「女性差別や女性の性についてのイメージがあり、男が関与するイメージがない」(男)

反対の解釈：

「男性、女性の良さを尊重しなければならない」(女)、「[ジェンダー論とは]男らしさ女らしさを学ぶ学問」(男)

学生が誤って捉えたジェンダーの第一の特徴は、「ジェンダー」を「性別／性差」として捉えている点である。必ずしも間違いではないのだが、肝心の

「性」そのものがどのような性であるのかということが書かれていない。そのため、「女性／男性」と書いてある性が「生物学的性」のことを表すのか「社会的性」のことをあらわすのか区別がつかない。また、多くの学生が「ジェンダー」を「性自認（ジェンダー・アイデンティティ）」や「セクシュアリティ」と混同していることも分かる。

第二の特徴は、学生が「ジェンダー」を何らかの差別に関わる問題だと捉えている点である。おそらくジェンダーが語られるとき、そこには必ず性の偏見やステレオタイプ、「らしさ」や固定的な性別役割分業の強制といった差別に結びつく状況があるために、「ジェンダー＝差別」と思い込んでしまったのであろう。ジェンダー概念の広義の意味においては、女と男の存在そのものがその権力関係のうちにあると言えなくもないが、基本的な知識として「ジェンダー＝差別」という捉え方は間違いであると言える。

第三の特徴は、学生が「ジェンダー」を「女の問題」として捉えていることである。これは、「ジェンダー」ということば（概念）が導入された経緯にその理由があると思われる。フェミニストたちは、「女権拡張」、「女性解放」、「男女不平等」や「性差別」ということばを使いながら女性に対する差別と闘ってきたが、1974年には「女性学」が誕生し、1995年の北京女性会議以降は、「ジェンダー」ということばが広く知られることになった。この経緯において、フェミニズムと女性学が内包する概念がそのまま「ジェンダー」に移行してしまい、「女の視点＝ジェンダーの視点」と解釈されてしまったのであろう。本来、「ジェンダー」の登場は「男性差別」をも取り込める点が画期的であったのだが、表層においては「フェミニズム・女性学＝女の問題」がそのまま「ジェンダー＝女の問題」と横滑りして見えているわけである。

こうした学生のジェンダーの捉え方は、(2)「だいたい分かっている」と(3)「ほとんど分かっている」の記述にも同様に見られる傾向である。学生が「ジェンダー」ということばを耳にしたことがあるならば、それは家庭か学校か、またはマスメディアからの情報であろう。そのいずれにおいても、ジェンダーの意味が学生には正確に伝わっていないことが分かる。

この原因のひとつと考えられるのは、「ジェンダー」ということばがエイゴ

であることである。もしこのことば（概念）が導入されたときに「社会的性」と訳され、専門用語として定着していれば、このような混乱は起こりにくかったのではないかと考えられる。山田雄一郎は、外国語が日本語化されるには、形式（カタカナ書きすること）と内容（意味の処理）の二面があると言う⁶⁾。「ジェンダー」に関して言えば、いまだに意味の処理が適切に行われていないということなのである。

3. 日本語人にとっての「フリー」とは何か

それでは日本語人にとって、「フリー」とはどのような語感をもつことばなのであろうか。それを知るために、現在英語を学んでいる大学生に、接尾辞“-free”がついた英語を訳す“-free”に関するアンケートを実施した⁷⁾。学生には、「alcohol-free（アルコール）」のように、“-free”以外の語に簡単な訳をつけて（表2、「意味」の網掛け部分）、アルファベット順に15語を提示し、意味を書くか説明してもらった。なお、本来「8」にある「gender-free（ジェンダー、社会的性）」については後述することとする。

（表2）“-free”に関するアンケート（回答数205名）

語彙	意味	正答(+曖昧)	誤答+無回答
1. alcohol-free	アルコールなしの	64 (31.2%)	89+52 (68.8%)
2. barrier-free	障壁、バリアのない	103(+44) (71.7%)	41+17 (28.3%)
3. care-free	不安、心配のない	93 (45.4%)	40+72 (54.6%)
4. content-free	内容、中味のない	29 (14.1%)	73+103 (85.9%)
5. drug-free	薬物のない	19 (9.3%)	87+99 (90.7%)
6. duty-free	税金が免除された	109 (53.2%)	42+54 (46.8%)
7. fat-free	脂肪なしの	71 (34.6%)	44+90 (65.4%)
9. gun-free	銃のない	16 (7.8%)	106+83 (92.2%)
10. link-free	HPのリンクなしの	3 (1.5%)	133+69 (98.5%)
11. milk-free	牛乳なしの	41 (20.0%)	53+111 (80.0%)
12. smoke-free	喫煙ではない	12 (5.9%)	154+39 (94.1%)
13. sugar-free	砂糖なしの	60 (29.3%)	67+78 (70.7%)
14. tax-free	税金なしの	92 (44.9%)	37+76 (55.1%)
15. trouble-free	問題、支障のない	88 (42.9%)	22+95 (57.1%)

最も正答率が高かったのは“barrier-free”の71.7%であった。正解者147

人のうち27人は、「段差のないこと」、「障害者のために家を改築すること」など、“barrier-free”の一側面のみを述べており、17人は「バリアフリー」⁽⁸⁾と書いていた。つまり英語がエイゴとして定着すると、間違っているとは言えないが正しいとも言えない曖昧な概念でそのことばを捉える人が多くなることが分かる。“barrier-free”以外の語にはこうした「定義の曖昧さ」がないことから、その他の英語はエイゴとしてまだ定着していないと推察できる。

ここで各語の誤答に目を向けてみよう。予想通り、多くの学生が正解とは反対の意味にその語を訳していた。例えば、“alcohol-free”は「アルコール飲み放題」、「drug-free」は「麻薬OK」、「gun-free」は「銃の所持自由」、「smoke-free」は「喫煙可」、「sugar-free」は「砂糖を好きなだけ入れていい」などである。つまり、“-free”の意味を「～なしの」ではなく、「～から自由な、自由に～する」と捉えているのである。これを証明するかのように、“link-free”の正答率はわずか1%台で、誤答133人のうちの91人が日本語のHPに見られる和製英語「このHPはリンク・フリーです（自由に他のHPにリンクしてよい）」の意味を挙げていた⁽⁹⁾。

アンケートの焦点は、英語の「名詞+free」のことばを「なし」と訳しているか、「自由」と訳しているかにあった。例えば日本語人は、「フリー・エージェント (free agent)」、「フリー・キック (free kick)」、「フリー・クライミング (free climbing)」などという語には慣れているし、同じ「フリー」でも、「フリーサイズ」、「フリー (=フリーランス：自由契約の) ライター」や、「フリーター」(フリーアルバイト：「アルバイト」はドイツ語由来)といったさまざまなカタカナ語を造り出している。しかしながら、こうした語はあくまでも「free+名詞」としての“free”の意味、つまり「自由な、束縛のない」という意味である。

ここで「ジェンダー・フリー」に関連した「フリー」の実例を見てみよう。『ジェンダー・フリーな教育のためにII - 女性問題研修プログラム開発報告書』(東京女性財団、1997年)の「3. モニターからの意見」の中には、「幼い頃からの習慣や個人の無意識にまでしみこんでいるものなので、どこまでフリーにすべきか悩むところだ」(p.19)や、「セックスがあるからジェンダー

が生まれたのに、それをどこまでもフリーにすることが可能なのでしょうか」(p. 41)と「フリー」が表現されている。また「ジェンダー・フリー教育」を批判する反フェミニストの林道義も「ジェンダーからフリーになろうとするのは大きな間違いであり」⁽¹⁰⁾と書いている。以上はどれも「ジェンダー・フリー」の「名詞+free」の意味ではなく、「free+名詞」の意味として「フリー」を捉えて、「フリーにする」「フリーになる」として使っている例である。

また、フェミニスト側の伊藤公雄は「男も女もフリースタイルで生きられる、ジェンダー・フリー（ジェンダーにとらわれない）社会の実現に向かって」⁽¹¹⁾と述べ、「free+名詞」と「名詞+free」を同じ「自由」として解釈しているし、田中統司は「ジェンダー・フリーな学校は、ちょうどバリア・フリーな学校がそうであるように」⁽¹²⁾と、共に「名詞+free」の語を、前者では「自由」、後者では「なし」の意味で捉え、「フリー」の意味を混同して使っている。“free”を何でも「自由な」と固定的に訳してみたり、恣意的に「自由な」や「なしの」と訳し分けが行われたり、「フリーにする」と連語を造ってみたりする“free”の日本語化は、「フリー」の意味の混乱を招いている証左である。

このように、英語では“free”を名詞の前に置くか後に置くかによって意味が異なることは案外知られていない。別の言い方をすると、日本語ではほとんど「フリー+名詞」としてしか「フリー」が使われていないので、「フリー」が後置されると、ときに誤訳が行われてしまうのである。東京女性財団のハンドブックが発行されて以来、「ジェンダー・フリー」ということばが定着していく過程で、そこに関わった誰ひとりとして誤訳に気づかぬままに普及させていった原因はここにあるのである。

4. “gender-free”を分析する

それでは、アンケートの“gender-free”の分析に入る前に、簡単に英語の“gender-free”と日本語の「ジェンダー・フリー」の意味を確認しておきたい。“gender-free”は言語領域において、またはセクシュアリティの観点から用いられる「ジェンダー（社会的性）のない」という意味である。前者で

は「非性差別語」や「性中立語」とほぼ同義語として、また後者では、女／男という性の二分法が解体した社会を表すときに用いられる。一方、日本語の「ジェンダー・フリー」は、女性学・ジェンダー論研究者の中でも、特に教育関連分野でのみ多用されてきたことばで、「固定的ジェンダー意識・規範からの解放、固定的なジェンダーに縛られることのない、ジェンダーにとらわれることのない」という意味で用いられている。

今回の調査に関しては、学生が英語の“gender-free”についての知識はない可能性が高いという推論から、和製英語としての「ジェンダー・フリー」を「正解」としてデータを取り、ことばの解釈の仕方を重視した。回答があった143人のうち（曖昧を含む）「正解」は96人(46.8%)で、「正解ではない」回答(47人)と、無回答(62人)の合計は109人(53.2%)であった。学生の記述は以下の通りで、前述「ジェンダーの定義に関するアンケート」に準じた分類を試みた。学生が恣意的なことばを選択しているために分類が難しかったが、むしろその点を以下の回答で確かめていただきたいと思う。ちなみに、多数を占めている「差別」のみ原文をまとめてあり、その他はすべて原文のままである。ただし誤記等は直してある。

「ジェンダー・フリー」の意味として書いたと思われるもの (96) :

規範 (5) :

「男らしく女らしくをなくそうとする」、「性別などの社会的差別の枠が外されること」、「ジェンダー差別がないこと」、「ジェンダーの区別がない」、「性別の境界線をなくす」

差別 (86) :

「性差別のない」(36)、「男女差別のない」(18)、「男女平等」(14)、「性差のない」(8)、「男女関係なく」(8)、「ジェンダーフリー」(2)

女性問題 (5) :

「女性差別の撤廃」、「女性差別をしない」、「女性参加社会」、「ジェンダーフリー：女性に優しい社会」、「フェミニストおばさんがよく使う言葉」

訳語の「ジェンダー、社会的性」を機械的に訳したと思われるもの (16) :

「社会的 (に) 自由 (である)」(5)、「ジェンダー (に) 関係のない」(2)、
「社会的性のない」(2)、「社会的性が自由 (である)」(2)、「性がない」
(2)、「ジェンダーがない」、「自由なジェンダー」、「開放社会」

誤訳 (31) :

「平等」(4)、「差別のない」(3)、「無差別」(3)、「社会的平等 (のこと)」
(2)、「差別解消」、「性問題」、「男女の機会均等の自由」、「公正社会」、「お
かま」、「格差のない社会」、「格差がない」、「社交的」、「社会化」、「社会保
障」、「人種平等」、「社会不適合」、「非常識」、「社会的性がない」、「性差を社
会的にとらえられないこと」、「禁止されない」、「自由な社会」、「自由主義」、
「ニート」

「ジェンダー・フリー」の意味として書いたと思われる96人のうち、「ジェ
ンダー・フリー」の概念を正確に捉えていると思われるのは、「規範」と「差
別」(94.8%)、曖昧に捉えているのは「女性問題」(5.2%)である。第一義的
には「ジェンダー・フリー」を「女性問題」と捉えることはできないので、
全体として「ジェンダー・フリー」を理解しているのは44.4%であった。

こうして見ると、一部のフェミニストが積極的に使っているこのことばの
学生への浸透率は4割強でしかないことが分かる。また先に述べたように、
学生が「フリー」を「～から自由な」と意味を取り違えていることを考慮に
入れると、この4割強の学生は「ジェンダー・フリー」を「ジェンダーから
自由になるという意味の英語だ」と信じていることになる。

5. まとめ

アンケートの回答から見てきたものは、まず大学生が「ジェンダー」の
概念をほとんど知らないということ、そして“-free”を正確に訳せていない
ということ、さらに、“gender-free”が「ジェンダーから自由になる」と誤
訳されていることに気づかずに、「ジェンダー・フリー」を理解しているとい
うことである。そして、たとえこのことばが和製英語であっても、一部のフ

フェミニストが主張している意味（概念）として学生に正確に伝わっているかと言えばそうでもなく、「ジェンダー・フリー」の定義ができた学生は半数にも満たない。

これを敷衍すると、こうした混乱は、大学生のみならずごく普通の日本語人の中でも起こっていると考えられる。なにより、「ジェンダー・フリー」ということばを広めたひとりである深谷和子は、「男女平等の用語は、これまで制度や待遇面での男女間の不平等の撤廃のための運動に使われてきた語だったが、最近はもっと日常的な男女の行動や心理に踏み込んだ問題提起がなされている。そうした際には男女平等より、ジェンダー・フリーの語の方が概念としても分かりやすい。むしろ欧米のジェンダー問題では、ジェンダー・フリーの用語の使用は普通のことである」⁽¹³⁾と「ジェンダー・フリー」を説明しているのである。前述したように、“gender-free”ということばは主に言語学およびセクシュアリティの領域でのみ使われており、深谷の言う「欧米のジェンダー問題では、ジェンダー・フリーの用語の使用は普通のこと」という認識がそもそも間違っていたのである。また、野村旗守は「ジェンダー【Ogender】」の横に、「ジェンダーフリー【×gender-free】 社会に定められた男らしさや女らしさは制度が決めたもので後天的なものだから、そんなものは無視して好き勝手に生きましようという、身勝手な日本のフェミニストたちがつくった和製英語」⁽¹⁴⁾と書いている。これについても、「ジェンダー・フリー」の解釈は別にしても、“gender-free”が和製英語であると断言していることには誤りがある。

伊田広行は「ジェンダーやジェンダーフリーには一言の日本語には置き換えられない豊富な意味があり」、「ジェンダーフリーを、ジェンダーレス、つまり『ジェンダーがないこと』『人間の中性化』『ジェンダーを無視すること』『ジェンダーというものを考えないこと（考慮にいれないこと）』であるというようにとらえて、この概念がダメだという人もいますが、そのような使い方をしてはいけない」⁽¹⁵⁾と言う。しかしながら、まず“gender-free”はまさに「ジェンダーがないこと」の意味であり、元々英語である“gender-free”を「ジェンダー・フリー」として日本語でその概念を再定義して、違う意味

をもたせて使用することを奨励すれば、さらに混乱が増すだけであろう。

どうしても「フリー」の語感を残したいのであれば、「ジェンダー・バイアス・フリー」のほうが英語として正確であるし、「ジェンダー・イクイティ (equity : 公平、衡平)」や「ジェンダー・イクオリティ (equality : 平等)⁽¹⁶⁾ということばはすでに認知されていることばである。もちろん、上記を「ジェンダー公平／衡平／平等」、さらに「社会的性の公平／衡平／平等」と日本語に訳すのが本来的であろう。「ジェンダー・フリー」の定義をめぐって混乱が起こっているのは、日本語人的言語感覚で“gender-free”がエイゴとして輸入されたことに原因の一端があるが、この混乱状態をどのように集約してゆくのが今後の課題である。

註

- (1) 主な事件としては：2003年7月、東京都教育委員会が都立七生養護学校の性教育で使用されていた全教材を回収：大阪豊中市の男女共同参画推進センター「すてっぷ」の非常勤館長だった三井マリ子が2003年度末で雇止め：2005年9月、国分寺市が上野千鶴子を「人権に関する講座」に講師として招く計画に対して東京都が拒否：2006年3月、福井県「生活学習館」情報ルームのジェンダー関連本150冊の撤去など。
- (2) 近年発行された書籍として、浅井春夫他『ジェンダーフリー・性教育バッシング—ここが知りたい50のQ&A』（大月書店、2003年）、上野千鶴子、辛淑玉『ジェンダーフリーは止まらない！—フェミバッシングを越えて』（ウイメンズブックストア松香堂書店、2002年）、木村涼子他『ジェンダー・フリー・トラブル —バッシング現象を検証する』（現代書館、2005年）などが挙げられる。バッシング派としては、西尾幹二、八木秀次『新・国民の油断 —「ジェンダーフリー」「過激な性教育」が日本を亡ぼす』（PHP研究所、2005年）。なお、本文、註で言及したものは含まない。
- (3) 山口智美「『ジェンダーフリー』論争とフェミニズム運動の失われた10年」、およびジェーン・マーティンとバーバラ・ヒューストンへのインタビュー「ジェンダーを考える」を参照のこと。共に双風舎編集部『バックラッシュ！～なぜジェンダーフリーは叩かれたのか～』双風舎、2006年。
- (4) 2005年7月に亡くなった寿岳章子が築いてきた女とことばに関する研究の軌跡を辿る

シンポジウムは2006年7月8日、シンポジウム実行委員会／現代日本語研究会主催で、お茶の水女子大学において行われた。

- (5) アンケート対象学生：日本大学文理学部の各学科1年生～4年生。科目：「ジェンダー論I(1)」（前期）、「ジェンダー論II(2)」（後期）。実施日：2006年4月12日および9月20日の授業初回のガイダンス時。学生はシラバスを読んで出席しており、前期ガイダンスでは「ジェンダー」のみ、後期ガイダンスでは「セックス、ジェンダー、セクシュアリティ」に関わる周辺的な例を挙げて簡単に説明した後、前期では「ジェンダー」について、後期では「セックス、ジェンダー、セクシュアリティ」について回答させている。そのため後期は「ジェンダー」の部分だけを抽出してデータ化している。
- (6) 『外来語の社会学 隠語化するコミュニケーション』春風社、2005年、p. 132。
- (7) アンケート対象学生：國學院大学と獨協大学の1～2年生(若干の3～4年生を含む)。なお、英語を専攻している学生は含まれない。科目：一般名称で言うところの「講読」「作文」「L.L.」「会話」。実施時期：2006年10月。
- (8) 学生が“barrier-free”を「バリアフリー」と訳すのは正解なのかもしれないが、エイゴが指し示す意味を日本語にできない学生が多いため、このアンケートでは「曖昧」としてデータ処理をした。例えば、“idea”を「アイデア」と訳すのは間違いではないが、本来は「思いつき、考え、思想」などと訳すほうが正しいし、“design”は「意匠、模様、計画」などのことである。
- (9) “link-free”は「リンクのない」という意味になり、このことばをHP上で使うことは不自然である。また、アンケートでは、別途「この中にはひとつだけ『和製英語』が混じっています。その語の番号に○をつけてください」という問いをたてたために、記入欄に○印をつけた上で無回答の学生が2人いた。205人中、“link-free”を和製英語と気づいたのは23人(11.2%)、気づいた上で「自由にリンクする」の意味を書いているのは13人いた。
- (10) 『家族を蔑む人々 フェミニズムへの理論的批判』PHP研究所、2005年、p. 71。
- (11) 国立婦人教育会館『女性学教育／学習ハンドブック ジェンダーフリーな社会をめざして(新版)』女性学・ジェンダー研究会編著、有斐閣、初版1997年、新版1999年、p. 30。
- (12) 『ジェンダー・フリーな教育のためにII ー女性問題研修プログラム開発報告書』(東京女性財団、1997年)、p. 104。

(13)同、p. 11。

(14)野村旗守編『男女平等バカ』別冊宝島Real、2006年、p. 2。

(15)「Q33 ジェンダーフリーという用語は誤解されやすく危険なので、使わないほうがいいという人がいますが、どうでしょうか？」日本女性学会ジェンダー研究会編『Q&A男女共同参画/ジェンダーフリー・バッシング―バックラッシュへの徹底反論』、2006年、p. 154、p. 157。

(16)「男女共同参画」の英語訳は“gender equality”である。

(ささき えり)